

今はお休みしているが、小唄と三味線を習っていたとき、そこでお金の使い方が新鮮だったというか、純邦楽とは縁がなく、普通の生活をしていたら、まったく知らなかったルールがあった。月謝の支払いはピアノのレッスンなどと同じだが、内輪の会を含め発表会となると、まず結婚式に招かれた時くらいにしか使わなかった祝儀袋を、何枚も用意しなくてはならなかった。

舞台上で私の三味線で唄ってくださる著名な師匠への謝礼、同じく私の唄の三味線を弾いてくださる兄弟子へお渡しする額を師匠にうかがい、祝儀袋に「御礼」、「御系代」、そして自分の名前を慣れない筆文字で書いた。楽屋に待機して三味線を調弦してくださる三味線屋さんにも同様の「御礼」をお渡しする。師匠への御礼の額は御本人には聞けないので、姉弟子にこっそり聞いた。金額的には一万円から五万円の間だった。

その他、会に参加してくださった師匠方へ、「蒔き物」を用意しなければならぬ。金額的にはひと箱千円程度の、お菓子だったりタオルだったりするのだが、箱ひとつひとつに外のしをかけて自分の名前を書く。それが毎回、三〇個ほどあった。紙袋に弟子が持ち寄っ



絵・江口修平

## お稽古のルール

群 ようこ

た蒔き物を分配して、師匠方にお持ち帰りいただく。それなりにまとまった金額の、発表会の出演料をお支払いしたうえでである。

私は純邦楽系の習い事をしたのははじめてだったので、会のためにお金が飛んでいくなあと思っていた。日本舞踊を習っていた妹弟子に聞いたら、

「日舞は大変でした」

といった。もちろん師匠によっても違うのだろうけれども、日舞の舞台となると、音曲も必要で、お化粧やら衣裳やら<sup>こしら</sup>えも多いため、自分の出演する舞台に関わる人がとても多くなる。なので私が発表会でお支払いする一〇倍くらい、毎回、支払ったそうである。

へえ、そうなのかと、他の和物の習い事のしきたりも知ったのだが、師匠の年齢が若くなるにつれ、なるべくお弟子さんたちには負担をかけないようなシステムになっているそうだ。一般的な習い事にはないルールも含めて、和物の習い事なのだ。入門してきたばかりの二〇代の妹弟子が、発表会に出演すると師匠に返事をした後、無邪気な笑顔で、

「私のギャラはいくらなんですか」

と聞いて、一同の度肝を抜いていたのも、いい思い出である。

むれ・ようこ●作家。1954年東京生まれ。日本大学芸術学部文芸学科卒。広告代理店、編集プロダクションを経て、本の雑誌社に勤務。84年に退社し文筆専業に。著書に「鞆に本だけつめこんで」（新潮文庫）「還暦着物日記」（文藝春秋）「かもめ食堂」（幻冬舎文庫）「老いと収納」（角川文庫）角川春樹事務所「れんげ荘」シリーズなどがある。

